

オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield)

【選定理由】

フクロウやコノハズク、アオバズクは、夜間よく通る声で鳴くので生息の確認は比較的容易であるが、本種の声は地味で小声のものが多く、生息の確認が困難な種である。県内の繁殖確認例は僅かであり、繁殖期の生息確認記録も少ない。しかし、越冬期は比較的観察記録が多く、2000年代の初めまではガラスや車との衝突などによる保護や拾得も度々発生していた。また、偶然に夜間活動する姿を確認したり、昼間休息している姿を確認する例も少なくなかった。2010年以降も確認例はあるが、その大半は確認を目的とした夜間調査で得られたものである。

【形態】

全長 24～25cm。全身が灰褐色で上面は黒色や灰色の複雑な斑があり、胸に黒褐色の虫食い状の斑がある。後頸に灰白色の大きな斑があり、羽角は長めで目の色は橙色。趾に羽毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

山地の林で繁殖し、冬期は都市部の緑地や沿岸部のグリーンベルトで越冬する例もある。

【国内の分布】

小笠原諸島を除く全国で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。南西諸島に生息するのは亜種リュウキュウオオコノハズク *O. l. pryeri* に区分される。

【世界の分布】

ネパール、中国東北部、朝鮮半島、台湾、マレー半島、大スンダ列島、バリ、カンゲアン諸島に分布する。



愛知県安城市, 2011年1月9日, 杉山時雄 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期に尾張および三河の山間部で鳴き声や姿が確認されており、樹洞で営巣した例も数例報告されている。以前には巣箱で営巣したという報告もあるが、確認数が少ないことから県内の繁殖数やその生態等については不明な部分が多い。小型の鳥類や哺乳類、昆虫などを捕食するとされるが、越冬期にムクドリやねぐらの周辺に生息して、これを捕獲した姿を見たこともある。また、冬期に公園の樹洞で観察されることもあり、春の渡りの季節に三河湾の島嶼でも記録がある。主に繁殖期にウォッ、ウォッ、ウォッと、ポウ、ポウ、ポウあるいはミューウ、ミューウ、などと鳴くが、他のフクロウ類のようによく通る声ではないので、その声で存在を確認することは容易でない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在も東三河や西三河の山間部で繁殖期の報告は数例あるが、県内の繁殖数はかなり少ないものと推測され、平野部での越冬個体も確認例が減少している。減少の要因として、渡りや越冬の季節に車やガラス等との衝突など、人による直接的な影響は小さくないものと思われる。

【保全上の留意点】

フクロウ類の営巣に樹洞は不可欠であるが、現在自然樹洞のある樹木が少なくなっている。代用として巣箱の設置は効果的なので、本種に合った巣箱の考案も必要であろう。

【特記事項】

かつて傷病による保護が多かった頃に、口の中に鳥の天然痘ができて衰弱したものを保護したことがある。猛禽類では、健康な獲物は捕獲が困難である。少し弱った獲物から、こうした病気が伝染して死亡するリスクは少なくないものと推測された。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.89. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)